

進捗状況の概要（2 ページ以内）

① 大学改革の加速

【高大接続によるグローバル人材育成の加速】

グローバル人材成長に資する高校生と大学生が共に学ぶ教育機会として平成 30 年度も「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」（10 科目、受講者合計：高校生 170 名）を実施した。さらに、高校生と大学生が共に学修する場である「IELTS 対策講座」や「日英中トライリンガルキャンプ」の継続実施に加え、昨年度に引き続き「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・吹替コンテスト」に高校生の参加を呼びかけ、目的を共有する者が集う場での集中特訓や能動的学修を通じて、高大の参加者に対し留学に向けた強い意識の醸成を促した。

【アドバンスト・プレイスメントによる高大接続の加速】

大成高校、順天高校（SGH 指定校）、県立神奈川総合高校、関東国際高校、聖徳学園高校、都立武蔵村山高校、都立調布南高校、都立府中東高校、藤村女子高校の 9 高校と締結した「アドバンスト・プレイスメントに関する覚書」を継続維持し、医学部 2 科目、保健学部 4 科目、総合政策学部 25 科目、外国語学部 37 科目の春学期・秋学期合計 68 科目を対象科目としてアドバンスト・プレイスメントを継続実施した。春学期開講科目の受講を希望する高校生履修登録者が 0 名となったため、急遽、夏季集中科目の開講を年度内に決定し、保健学部 4 科目（基礎生物学・基礎化学・基礎物理学・基礎数学）、総合政策学部 1 科目（近現代史と現代社会）、外国語学部 1 科目（目的別英語演習）を開講したところ、計 114 名の高校生が履修し、123 単位がアドバンスト・プレイスメントとして認定された。さらに 3 月に実施された日英中トライリンガルキャンプには高校生 29 名が参加し、口語中国語の科目として 29 単位をアドバンスト・プレイスメントで認定した。キャンプに参加した高校生は本学への入学予定者も多数おり、入学前教育、初年次教育の一環として位置づけられるものとなった。本年度中にアドバンスト・プレイスメントで単位認定を受けた高校生は合計 128 名、認定された単位数は 152 単位となり、目標値 50 名、100 単位を上回る結果となった。

【全学的高大連携の加速】

高校関係者との意見交換の場として高大接続ラウンドテーブルを事業採択直後から定期開催し、平成 30 年度は第 12 回、第 13 回の年 2 回開催した。校長をはじめとする高校関係者が、第 12 回には 13 校 18 名、第 13 回には 15 校 22 名が参加して、学長をはじめとする杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。平成 30 年度も新たに高大連携協定を都立調布南高校と締結し、連携高校が増大するにつれ（累積校数 H26：4 校→H30：10 校）、高大連携事業が全学的に拡大した。平成 30 年度の実績例を上げると、聖徳学園高校の医学部実習、いじめ防止活動に対する保健学部協力、都立三鷹中等教育学校や都立青梅総合高校に対しインターンシップ提供などがある。

また、高校との合同研修として位置づけている「第 5 回 高校と大学をつなぐ FD/SD」を杏林大学井の頭キャンパスで開催した。講師は、早稲田大学入学センター副センター長沖清豪教授で、演題は「学生の変容からみた高大接続改革の意義と課題」で、高校教員 3 名、杏林大学教職員 84 名が参加した。

② 事業の実施体制

本事業採択直後より学内に学長を委員長とする AP 推進委員会を組織し、隔月で委員会を開催してきた。平成 30 年度も第 22 回から第 26 回までの計 5 回を開催し事業の進捗を図ってきた。下部組織である高大接続推進委員会が具体的事業実施主体として事業の運営を司り、高大接続を進めている。高大接続推進委員会も隔月開催し、平成 30 年度も第 36 回から第 41 回までの 6 回開催し事業運営を行ってきている。さらには他大学教員・高校教員の外部評価委員から構成される第三者評価委員会を開催することで、事業計画の妥当性や事業の進捗・達成状況の点検・評価を行い、課題を客観的な視点から分析し各種事業の改善を図っている。

③ 事業の実施計画・継続性

【補助期間終了後の継続発展に向けた取組】

入学前教育及び初年次教育の改革としては、アドバンスト・プレイスメントの実施は入学前教育を画期的に改革するものであるが、さらに本事業の目的である日英中トライリンガル育成を加速するために、初年次に少人数の「スーパーグローバルクラス」を編成し、1年次（2セメスター）終了時には留学できる英語力・中国語力の養成を目指している。一方、高大接続改革の入試改革として、学力の3要素のうち「主体性を持ち多様な人々と協働しつつ学習する態度」を多面的評価するルーブリックを開発し、本年度も昨年度に引き続き平成31年度外国語学部A0入試Ⅱ期（グローバル型）で選抜方法の一部として使用した。

【体制的な継続性】

補助期間終了後も継続的かつ発展的に本事業を実施していくことは、事業申請時の平成26年5月12日学部長会議にて決議、7月14日運営審議会にて承認されている。学内体制の継続性については、事業実施主体であるAP推進委員会・高大接続推進委員会を中心に、補助事業終了後も、継続的かつ発展的に事業を実施していく。専門人材の配置については、本事業で開設したライティングセンターの特任教員については、補助期間終了後は、専任あるいは兼任教員がライティングセンターの運営を担う。高大接続推進室の派遣職員の業務は、専任職員が担う。学外との連携体制については、本事業開始とともに始めた高大接続ラウンドテーブル（杏林APラウンドテーブル）は、現在は年2回定期開催しており、本協議会を補助期間終了後も定期開催し、高校との連携体制を強化していく。また、高大連携協定締結校はむやみに数を増やすのではなく、グローバル人材育成という共通の教育目標を掲げる高校とアドバンスト・プレイスメントによって高大接続を図り、実質的な連携を深めていく。

④ 事業成果の普及

【アドバンスト・プレイスメントの普及】

杏林大学が先駆的モデルとなり、全国にアドバンスト・プレイスメントによる大学間連携の輪を広げるために、事業採択直後から次のような取組を実施してきている。本学入学志望の高校生だけを対象にせず、制度本来の意義を踏まえ、修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度構築を図るため、アドバンスト・プレイスメントラウンドテーブルを3回開催し、制度の理解・普及を図った。また、桜美林大学（平成29年3月）、共愛学園前橋国際大学（平成29年5月）、創価大学（平成29年9月）の3大学と「アドバンスト・プレイスメントによる大学間単位互換協定」を締結し、互いの大学で高校生が修得した単位を入学後に単位認定する仕組みを構築した。

⑤ 選定されたテーマの取組を中核にした総合的な大学教育改革の取組

【高大接続改革の加速】

3つのポリシーの一体的策定に関して、高大接続システム改革会議「最終報告」に沿い、平成28年度中に本学の各学部、各学科の三つの方針を整合性・一貫性という観点からの見直し・再点検を行い、平成29年度に改定し、30年度には見直し・一部改定を実施した。

【多面的・総合的評価を行うルーブリックの開発】

学力の3要素のうち「③ 主体性を持ち多様な人々と協働しつつ学習する態度」を評価するルーブリックを開発し、平成29年度外国語学部入学予定者（推薦・AO入試合格者）に対する試用を経て、平成30年度入試に引き続き、平成31年度外国語学部A0入試（第Ⅱ期：グローバル型）で利用した。

【語学教育環境の整備と留学支援の加速】

GGJで整備した英語サロン、中国語サロンに続き、本事業で開設したライティングセンターを全学の学生だけでなく高校生にも開放し、アカデミック・ライティングの学修や海外協定校留学などの長期留学に必要とされるライティング力の養成を行い、グローバル人材育成の加速を図った。